

<翻 訳>

言語と言語学の本性を考え直す

—Raimo Anttila 論文選集 (2) —

伊 藤 忠 夫 選・訳

訳者解説

<論集『歴史言語学における説明』(1992)>

論文(2)として、今回訳載する Raimo Anttila の論文は、

‘Historical explanation and historical linguistics’ と題されたもので、

Garry W. Davis and Gregory K. Inverson (eds.) *Explanation in Historical Linguistics*. Current Issues in Linguistic Theory 84. (J. Benjamins, 1992), pp. 17-39. に収められている。

初めに、この論集について簡単に説明しておこう。

これは、1990年4月20～22日に開催された「第19回年次ウィスコンシン—ミルウォーキー大学言語学シンポジウム」で発表された報告のなかから選択されたものを中心に、13編の論文を集めてなった論集である。この時のテーマは、論集のタイトルそのもの、つまり「歴史言語学における説明」であった。寄稿論文の中から選んで、2巻の論集の発行が企画され、その1冊目にあたる。2冊目は、grammaticalization 関係のものを集めて、同じシリーズ Current Issues in Linguistic Theory の109に、Pagliuca, W. (ed.) *Perspectives on Grammaticalization* として昨年刊行された。

本訳文中にあらわれる「この会議」とは、上記シンポジウムを指している。

<編集者による要約>

上記論集の「序文」には、収められたすべての論文の編集者による要約が与えられている。訳者の解説を述べる前に、その全文を紹介しておこう。

「Raimo Anttila の論文「歴史的説明と歴史言語学」は、歴史言語学を歴史と語用論、彼はそれを「文脈」“contexts”と呼んでいるが、から切り離すことはできない、と主張する。そこで、Anttila にとっては、歴史は理論的に、言語とその

使用に関して第一義的であり、そして、言語変化の説明は根底において、類推と仮説形成のような合理的説明に頼らなければならないとする。歴史的変化の Anttila の説明の一つの側面は、話し手の個々の行為は集団的な集成体に「はめこまれ」“telescoped”, その集成体が今度は代わって (Smith に従って) 彼の言う「見えざる手の諸過程」“invisible hand processes” を経由して変化を生じさせる, というものである。Anttila の見解では、見えざる手による説明は、(予測可能性の次元は欠けているかも知れないが) 厳密な意味での歴史的説明であり、そして、言語変化は、社会-文化的変化の重要部分である。Anttila は従って、フィロロジー・文献言語学が言語変化を引き起こす話し手の集団的言語行為の解明における有用な用具であるという理由で、フィロロジーを言語学から切り離すことに反対する主張を展開している。」(p. viii)

この要約は、多岐にわたる著者の議論の中で、編集者がもっとも重要とみなす「歴史的変化の Anttila の説明の一つの側面」[傍点は訳者]に絞りつつ、他の主張の要点を示している。この要約を一応前提として、もう少し詳しく訳者なりの解説を試みよう。

＜論文の構成とその要点＞

論文(1)の「小見出し」は、すべて訳者が入れたものであったが、今回の論文(2)の各節の「小見出し」はすべて原文に与えられている。

まず全体の構成を見るために、各節の小見出しを書き出してみよう。

現況の説明
場面の論理
論理、そして、歴史の優先性
行為の論理
再演
記号論的展望
行為の集団的側面
フィロロジーの普遍性

これらのサブ・タイトルを見ても、その展開の筋は必ずしもはっきり見えてこないと思われる。

「フィロロジーの普遍性」は、その位置からしてもこの論文の結論部分であるが、そこに Anttila が「この会議」のテーマ「歴史言語学における説明」を知って報告をすることになった時、どのような基本的姿勢で取り組むことにしたかを語る文章がある。

「本論文で手短に輪郭の描かれた諸観念は、自明であろうか。恐らくそうであろう、あるいは、少なくとも、そうであるべきである。それらの観念は、言語学における、特に歴史言語学における基礎的能力の一部であるはずである、ところが、言語学において人は、歴史的説明の議論や歴史の哲学に出会うことは事実

上決してない。その代わり、さまざまな形式化 formalizations が説明として提出されており、時には、類推と仮説形成のようなどこでも起こっている現象が形式化できないという悲嘆の声を伴っている。これはだから、それらが説明に正統的に用いることは出来ないと言っているものと考えられる。」（本訳文 204 頁）

この上の文章をまとめ直すと、こういうことになる。①「言語学において人は、歴史的説明の議論や歴史の哲学に出会うことは事実上決してない。」そのような状況は不可解である。従って、歴史的説明とは何か、歴史言語学にとって有益な歴史の哲学とはどのような内容のものであるか、について触れなければならない、という課題がでてくる。②「類推と仮説形成のようなどこでも起こっている現象が形式化できないという悲嘆の声」が聞かれる。なぜか。それは、形式化が説明と取り違えられているからである。従って、「類推と仮説形成のようなどこでも起こっている現象」をきちんと位置付けられるような論理を提示する必要がある、ということになる。

この二つの課題は、少なくとも Anttila にとっては、きわめて密接に関連し、絡み合っているはずである。そこで、行論の筋は、論理と歴史をある時は区別し、ある時はまとめて扱う、という形にならざるをえないだろうと思われる。

このような基本的姿勢を前提にすると、おおよそ次のような展開になる。

①まず導入部分として「現況の説明」をし、②「場面の論理」と関連させて、歴史、歴史的説明、合理性に簡単に触れ、その後、③ただちに「論理」と「歴史」をまとめて取り上げて、主要論点を明確に提示する。④前節で変化の論理について述べたので、それに続けて変化を生み出す動作主の目的をめざす「行為の論理」に移り、⑤もう一度歴史に戻って、歴史・歴史的説明と「再演」というとらえ方との関連を解明し、⑥そこまでに述べてきた論理と歴史・歴史的説明の基礎的枠組み・構図が「記号学的展望」と重なることを明らかにする。⑦そして、言語変化は人間集団によるものであるのだから、「行為の集団的側面」を改めて強調し、⑧しめくくりとして、以上のような論理、展望をふまえて探究が行なわれる「フィロロジーの普遍性」を指摘して、論を閉じる。

このような構想を Anttila は抱いたものと訳者には思われる。

これは優に 1 冊の本として記述し、説明されるべき内容である。それをわずか数十頁の論文で説き明かそうというのであるから、例によって、叙述はきわめて圧縮され、あるいは飛躍のおおいものにならざるを得ないだろう。いわば、大風呂敷を広げたが、詳細に説得的に展開するには、あまりに紙数が不足している、ということである。しかし、論文(1)と重ねあわせて読んでいただければ、主張の内容はいくぶんかは伝わり易くなると思われる。本論文選集では、論文(1)と論文(2)は、新しくかつ一般的内容のものを選択しており、主要な論点の多くは重なっている。そして、

一方で比較的詳しく述べられている点は、他方では圧縮して述べるに止める、というやり方で書かれていると見られる。本論文とともに、論文(1)を再読していただくと、同意するか否かは別にして、著者の主張がより明確になるであろう。

以下では簡単に各節の内容の要点を指摘しよう。各節の叙述にとくに対応するとされる論文(1)の部分を書き添えることにする。

(1)「現況の説明」では、現況では驚くべきことに、歴史言語学が歴史や歴史的説明と結び付けられることがほとんどないことを指摘し、それは、言語学者が誤って自然科学にならって、独立した構造体を説明しようと考えているからだ、と断ずる。

論文(1) pp. 267-271 参照。

アメリカを中心とする言語学の現況についての著者の把握に関しては、論文(1)の方がより明確、戦闘的、批判的に、詳しく述べられている。

(2)それに続く「場面の論理」では、歴史的説明については、これまでに Max Weber 以来さまざまな議論があり、また、それ以前の言語学者によっても、重要な基本的な概念がすでに提示されていることを指摘し、現況では、大多数の言語学者がそれに目を向けていない故に、歴史的説明の問題が依然として重要であるという。

明確な対応ではないが、論文(1) pp. 272-275 参照。

(3)第3節「論理、そして、歴史の優先性」では、「歴史的説明は動作主の目的が中心的重要性を持つすべての領域における説明様式なのであるから、我々は、行為の論理以前に変化の論理を必要とする」として、演繹、帰納と並んで、変化の論理と密接に関連し、変化を生み出す源の一つであるアブダクション・仮説形成推論、仮説形成三段論法について述べ、続いて、変化を説明する発生的説明 genetic explanation の基礎的構造を解明する。

論文(1) pp. 277-280, 283-289 参照。

(4)「行為の論理」では、仮説形成推論よりさらに重要な変化の源になる実践的三段論法を取り上げ、行為の論理の研究において転換をもたらした von Wright の主張を紹介しつつ、その三段論法の特徴を説明する。そして、それが歴史と密接に関連していることを指摘し、さらに、von Wright の主張を理論言語学に適用している Esa Itkonen に触れ、彼の行為論的三段論法 actionist syllogisms を紹介し、これが歴史的変化と結びついていることを明らかにする。

論文(1) pp. 275-277, 295-297 参照。変化の源としての仮説形成三段論法、実践的三段論法については、とくに同訳注 [7] も参照。

仮説形成三段論法、実践的三段論法の説明は、本論文の方が論文(1)の説明より詳しく、理解しやすい。相互に参照することを勧めたい。

(5)「再演」の節では、Collingwood (1946) の再演による説明が扱われる。この概念はすべての社会科学の背後で働いているがとくに歴史にとって適切であるとい

う。そこから、歴史と解釈学の同一性という考えが提出される。そして、von Wright の実践的三段論法を中心とする主張が、Collingwood の再演による説明と結び付けられると、歴史における説明のモデルとして非常に有効なものが得られるという Martin (1977) の考えを紹介する。そしてさらに、Martin の説明のための三角形と Esa Itkonen の行為論的三段論法が本質において一致することを指摘し、そこでは、A. Boeckh が前世紀にすでに指摘していたように、解釈のために必要な百科事典的知識が入りこんでくるという。

論文(1)には、「再演」に関するそれとしての言及はないが、p.269 には、歴史の地位の問題に関連して Collingwood (1946) 以来解釈学的路線が力を得つつあるとの指摘が見られる。

(6)このように、変化の論理、行為の論理、歴史、歴史的説明が相互に関連づけられたのであるが、これはまた、単純化の危険はあるものの、解釈ということを中心として、記号の三角形と関連していることが指摘される。つまり「記号学的展望」において、それらすべてが占めるべき正当な位置づけ・関連づけを得る、というのである。ここでは、上で紹介した編集者による要約でも指摘されていたように、文脈の重要性が強調されている。

論文(1) pp. 275-278 参照。

記号学、また、記号の種類、シンボルの特徴等については、論文(1)の方がはるかに詳しい。

(7)そこからさらに一步を進めて、18 世紀スコットランドの哲学者たちが到達した「行為の集団的側面」の解明＝「見えざる手による説明」、さらに「推測的歴史」の重要性が R. Keller の研究を紹介しつつ説明され、さらに、見えざる手による説明の構図と von Wright の実践的三段論法による説明における構図との親縁性も指摘される。そして、編集者による要約にも述べられているように、見えざる手による説明のすぐれたものは、厳密な意味での説明となるとの主張がなされている。

論文(1) pp. 296-298 参照。

「見えざる手による説明」については、本論文の方が詳しい。

(8)このようにして、論理、歴史、歴史的説明の関連が明らかにされ、当初立てた（と思われる）目標が一先ず達成されたことになる。結論部分の「フィロロジーの普遍性」では、1988 年 3 月に開催された「フィロロジーとは何か」をテーマとした Harvard 会議での報告をいくつか紹介しつつ、「文脈」を重視して行なわれるフィロロジーこそが言語にかかわるあらゆる研究を包括する普遍性をもつ学問であるとの信念が述べられる。本論文の最後の文章を引用しておこう。

「そして、以上のすべてに対して、フィロロジーには堅固な理論が存在しており、フィロロジーは従って、現在行なわれている形式主義的言語学より良く変化と歴史的過程を説明することが出来るのである。歴史は理論的には、言語とその使用の事柄においてもっとも重要な位置を占める——共時言語学は、必要ではあるけれども、実際の便宜のためのものである。シンボルの構造そのものが、

それに内在する目的論と共に、そのことを示している。歴史言語学は基本的に合理的説明に頼らなければならない。これは、正当な文脈における「とんでもない」“crazy” 解釈でさえも合理的であり得ることを意味する。」(本訳文 204 頁)

翻訳にあたって、次のような処理法にしたがった。

- ①本文のイタリックは、傍点を付し、その原語を後に示す。
- ②本文の引用符で囲まれた部分は、「」に入れる。短い語句の場合は、その後に原語を示す。
- ③その他の原語は、訳者の判断で入れたもので、その選択には明確な基準はない。
- ④〔 〕内の文字は、訳者の補足である。
- ⑤原注は、^()に入れて示した。
- ⑥訳注は、^[]に入れて示した。

また、言語学関係の術語の日本語訳は、主として『現代言語学辞典』(成美堂, 1988) のものを用いた。

2. 歴史的説明と歴史言語学

ライモ・アンティラ

カルフォルニア大学ロス・アンゼルス校

現況の説明

言語学の現況に関しては二つの種類の意識が存在する、即ち、非常な多様性と寛容がこの分野を支配している、という意識と、歴史と理論はどういうわけか両立しない、という意識である。歴史言語学が真面目に取り上げられるのは、それが理論に奉仕する形で利用される場合だけであり、その利用はただちに寛容と多様性を帳消しにする。これは、相当の理論的および「政治的」“political” 混乱が存在することを意味する。他方で、歴史言語学は、主要な関心の的として浮上しつつあり、それは統語論に次ぐ位置にある (*Language* 65. 798, 920 [1989] 参照)。それは、重要な感覚をもたらしている、つまり、人が興味あると思うことはもちろん正当だ、という感覚であり、そこで、理論的基盤への追究は何も必要がないらしいのである。これにはある程度の真理が含まれている、言い換えれば、少なくとも

も実用的な重みはあるが、しかし、それが歴史や歴史的説明が働くやり方であるわけではない。しかし、最大の驚きは、歴史言語学が歴史や歴史的説明とほとんど結び付けられていないことである⁽¹⁾、ただし、メタ理論的議論が時折正しい方向を取ることはある（例えば、Romaine 1982⁽²⁾）。そういうことになる理由はある意味では、構造主義的「呪い」“curse”である：つまり、言語学者は自然科学の後援の下で独立した諸構造を説明したいと思っているのである⁽³⁾。そういう訳で、Lass (1980) のような試みが本当には歴史を公正に扱わなかったのであり、また、Lightfoot (1979) のような数多くの形式主義的扱いも同じだったのである。今やその事態は、この会議^[1]における Bernd Heine, Richard Janda, Brian Joseph による論文を参照するだけでも、改善に近付いているように思われる⁽⁴⁾。

場面の論理

もちろん、歴史的説明の諸問題に対しては、解釈学的立場と実証主義的立場の双方において、長く内容のある歴史がある。Max Weber は、場面・状況の論理 logic of the situation を定式化し、そして、この論理は、Karl Popper と Carl Hempel によって反対側の立場で取り上げられたが、この二人は、問題を合理的説明と統計的分析の方へ移行させたのである⁽⁵⁾。合理性は、近代言語学の基盤にとって決定的に重要な観念であった（von Humboldt, Whitney）。一般的には、フィロロジー・文献言語学は、歴史にとっての基本的科学とみなされ、そして、歴史の現存は、ドイツの解釈学において意味の基礎的定義づけであったが、それはアメリカにおいても無縁な立場ではなかった、Peirce (CP 6. 301) を見よ：

運動があるところ、歴史が形成途上にあるところに、心的活動の焦点が存在する、そして、以前から言われていることだが、諸技能と諸科学は Janus の神殿の域内に住まいしており、それが開いている時には目覚めているが、それが閉じている時にはまどろんでいるのである。

大多数の言語学者は、認知科学が今や専門的流行語になってはいるが、精神が非常に緊密に経験と歴史と結びついているのだろうという可能性について考えない。その代わりに彼らはむしろ、合理性と目的因に直接的に反対する立場に立っている。そういう理由で、歴史的説明の問題が依然とし

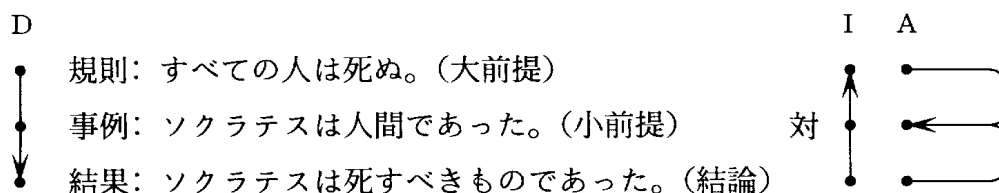
て重要な問題であり続けているのである⁽⁶⁾。

論理, そして, 歴史の優先性

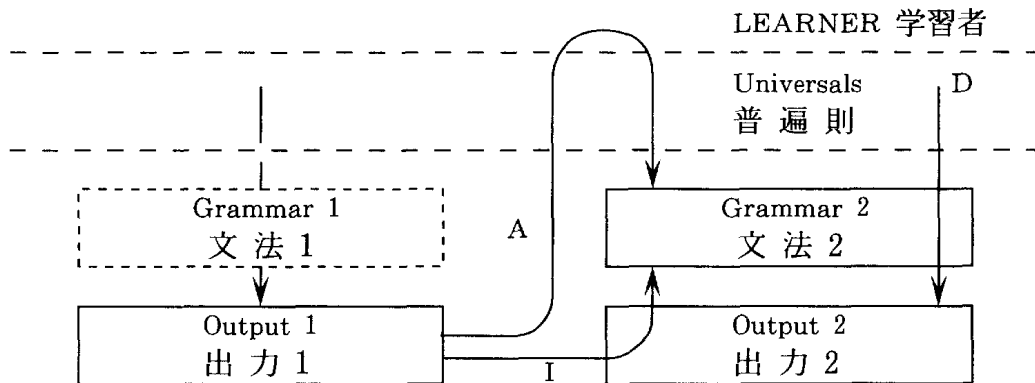
歴史の優先性 *primacy of history* は, Collingwood (1946) において (アングロ・サクソン世界で) 説得力をもって現われたが, 彼は, 思考としての精神 *mind-as-thought* の分析の基礎的カテゴリーが変化であるという精神の過程観を明確に示した: 「人間本性あるいは人間精神のいわゆる科学は, 歴史のなかに溶け込んでいく」 (p. 220) (Martin 1977: 16, 27, 31 参照)。歴史的説明は動作主の目的が中心的重要性を持つすべての領域における説明様式なのであるから, 我々は, 行為の論理以前に変化の論理を必要とする (von Wright 1963)。求められている論理は, 形式的なものよりむしろ経験的なものである (Peirce 1976: 262; Anttila 1981: 214, 1989b: 7 参照):

今日私に論理的という印象を与えるものが, 必ずしも論理的であるわけではない。まして, 数学が十分に例証しているように, 私にとってそう見えるものだけが論理的であるなどということはない。宇宙を理解可能にするために認めることが必要なものが, 論理的なのである。そして, すべての論理的原則の第一は, 不確定なものは出来る限り自らを確定的なものにするべきだということである。

Martin (1977: 208) は Wittgenstein を引用している: 「言語ゲームを記述するあらゆるものは, 論理の一部である」。これは, 歴史においては良い記述は説明であるという事実のもう一つの言い方であり, そして, これは, 理論言語学者が困難に出会っている側面である。言語学者にもっともよく理解されている側面は, 仮説形成・アブダクションであるが, 類推, 俗綴法 (Darmesteter), 民衆的論理 (Bréal) などの名前の下に扱われている。二つの主な定式が用いられる。一つは事例を推論する (例えば, Anttila 1989a: 196 参照):



D, I, A の文字は、それぞれ演繹、帰納、仮説形成を示す。帰納は演繹の順序を逆転させる：つまり、我々は、事例と結果から規則を推論する。仮説形成は、規則と結果から事例を推論する。これらの様式は、言語学習と言語変化においては、次のような形で絡み合っている（例えば、Anttila 1989a:197）：



文法 2 は、学習者の、言い換えれば「言語製作者の」‘language-maker’s’（使用者の、変化創出者の）文法である。仮説形成は、あることが事例であるかも知れない、ということを示唆し^[2]、演繹は、それが事例でなければならないことを証明し、そして、帰納は、それを検証する。破線は、その区画が直接的には手に入れることが出来ないことを示す。そして、「普遍則」‘universals’は両端が開いていることに注意してほしい、というのは、それらが厳密にどのようなものか分かっていないからである。仮説形成三段論法 abductive syllogism のもう一つの形式は、より一般的である（Anttila 1989a: 404 参照）：

仮説形成 驚くべき事実 C が観察される。

三段論法 しかし、もし A が真実ならば、C は当然のことであろう。

そこで、A が真実であると推測すべき理由がある。

ここでの本質的な点は、先行するものが結論を含意することである、つまり、この三段論法は「前に向かって」‘forward’ 漏れるのであり、文脈におけるある解決に向かう引き pull が存在する（場面の論理）、ということである⁽⁷⁾。

演繹はそこで、歴史にとっては役に立つことがもっとも少ないことになる。これは、Whitney によってもすでに力説されていた、彼は、言語学が

帰納的科学であり、実際には歴史的文化的科学であって、ドイツにおいて考えられていたように自然科学 (Nerlich 1990: 28, 31) ではないことを強調した。彼は、言語の馬鹿げた、あるいはぼんやりした理論を作り上げることを避けるために、帰納と演繹の間のバランスを取ることを主張した (p. 32)。Whitney はもちろん、帰納と仮説形成の間の区別を立ててはいないが、それは今も普通に見られることであり、両者の境界線は事実微妙である (Savan 1980 を見よ)。そればかりでなく、Dougherty (1983) は、演繹が現象学的基盤を必要とするという事実到我々の注意を引いている。数学は、精神の創造物にだけ関係するが、しかし、事実の現実世界の中に入り込むためには、我々は、橋渡しとして現象学を必要とするという。これは、現象学を実証的な経験科学にするものであり (p. 171)、歴史的であろうと別のものであろうと、言語学者が忌み嫌う立場である。いずれにしても、すべての卵を演繹の籠の中に入れることは、歴史の破壊的手からそれらを引き離すが、しかし、同時に、説明からも引き離してしまうのである。

もう一方の漏れ穴のある三段論法である実践的三段論法 (二つとも Aristotle から来ており、だから二つとも新しかりの流行ではないことを記憶しておいてほしいが) に進む前に、発生的説明、つまり歴史的説明の基礎的構造を思い起すことが有益である (Anttila 1989a: 25, 180, 402 参照):

発生的 状況 A は、それより以前の状態 B によって説明され、
説明 B は今度は代わってそれ以前の状態 C によって説明される、
等々。

歴史の優先性は、Coseriu の著作において力強く述べられている (例えば、1979, 1980^[3]): 逆説的だが、未来が非常に重要な役割を演ずるのである。ある言語は、その全体を一つの歴史的産物としてはっきりつかむことは出来ない、なぜなら、未来の次元が我々の視界に対してまだ実現していない諸可能性と諸潜在性を付加し、そして、それらは現実の事実としてそこにはないからである。我々は、未来を何らかの確定性をもって経験することは出来ない。それを研究するためには、我々は、過去として、(我々がすでに過去として知っている) 未来とのその関係において研究しなければならない。言い換えれば^[4]、研究の年代的切断面である C は、その未来と

してBをもっており、Bは、現在の我々の有利な位置であるAからは、すでに過去なのである。発生的説明においては、より初期の事態(B)は、現存する状態(A)を因果的に(「後方から」‘from behind’)説明するものではなく、未来の観点から(「前方から」‘from in front’)説明するのである：言い換えれば、より後の時点(B,A)が実際にはより初期の状態(C,B)の諸可能性を確定するのである⁽⁸⁾。厳密な共時的様式においては、人は、実際の諸可能性について全く分からないだろう、なぜなら、それらの可能性は歴史のなかの話し手によって悟られなければならないのだからである。共時的説明は実際には不可能である、なぜなら、いかなる説明に対しても、人はなにか他のものに言及しなければならないからである。こうして、記述言語学は、言語ではなく、話し言葉・スピーチを説明する。人がある言語がなぜ現にある姿をしているかを説明したいと望む瞬間に、人は、歴史全般の場合と同様に、発生的説明に頼らなければならないのである。我々は、さまざまな力をさまざまな原因に還元するのではなく、我々は、事実を目的因的 finalistic 発展において観察するのである。人間活動における疑問は、「何の目的のために」‘for what purpose’である、つまり、「なぜブルータスはシーザーを殺したのか」‘Why did Brutus murder Caesar?’ではなくて「何の目的のために私ならシーザーを殺しただろうか」‘For what purpose would I have murdered Caesar?’なのである。「何の目的のために」‘for what purpose’という疑問に答えるのであるから、我々は、事実のより深い理解を獲得して、より初期の事態をより後の事態で説明するのである。重要な点は、事態がより正確な理解を以てその進展によって説明されるということである。可能性が明らかにされ、体系の開放性が証明される。変化は今やまさに言語の創造、使用である：つまり、歴史は、対象の必須の部分であって、記述への付加部分ではないのである。自然の対象においては、我々は、かなりの程度まで在ること/存在 being/existence を成ること・生成 becoming から切り離すことができるが、しかし、文化的対象や文化的活動においてはそれは不可能である、というのは、そこでは生成が存在の本質そのものだからである⁽⁹⁾。言語使用は、(再)解釈された伝統である。要するに、歴史言語学だけが言語にかかわる我々の実際の経験と言語の本質を公正に扱うのである。これはもちろん共時態を否

定するものではない。ある言語状態の共時的＝構造的扱いは、記述のための唯一の穏当な扱いである、とはいえ、ある文化対象の記述はその対象の生成の一つの局面に属する。記述と歴史の間には矛盾対立は存在しない。Hermann Paul が言ったように、言語学は実は歴史言語学なのである。目的論、あるいは目的因はこのようにして、本来的に歴史と連結しているのである (Short 1981, Shapiro 1985, MS 1989; Anttila 1989a: 402-405 参照)。言語学者たちが一貫して目的論と歴史双方を避けようとすることに不思議はない、とはいえ、時には彼らは、形式的原因 formal causes が変化を説明すると信じている。同じ姿勢が語っていると思われることは、心理学は受け入れ可能である (仮説形成は人間の認知的能力の心理学的構成と結びついているに違いないと想定しているからだ) が、哲学は受け入れられない、あるいは、人がやることは自動的に固有の哲学だ、ということである。これは不十分な立場である (Trigg 1985: 202-205 参照)。

行為の論理

行為の論理の研究における転換点は、von Wright (1971) によってもたらされたが、この著作において彼は、実践的三段論法 (推論) を哲学的つまり分析的解釈学に組み入れた。人は、学問のその路線を、主体の役割に正当な注意を与えることと特徴づけることが出来る、そして、そういう訳で、私は、本論文の冒頭で (この会議における) Brian Joseph の立場に言及したのである。von Wright は、3 つの図形を提示 (137, 138, 143^[6]) し、それらは簡潔に、ヒュームの Humean 及び非ヒューム的原因がいかに歴史的説明において絡み合っているかを示している。一般的に、歴史的説明は常に、その二つの間の曲線、あるいは波を示す、つまり、人間の行為はいかに外的状況によっても影響されるものであるか、ということである。実践的三段論法の基礎的構造は、次のように提示できる (von Wright 1971: 96-98, Itkonen 1974: 298 [また 1983: 101] ; Anttila 1977: 126 参照):

- | | |
|------|------------------------------------|
| 実践的 | X は G を達成しようと意図している。 |
| 三段論法 | X は、彼が A をしなければ、G を達成しないだろうと信じている。 |

従って、X は A をすることに取りかかる。

ここでは人は、行為の背後の意図に到達しなければならない、そして、我々は、仮説形成三段論法におけると同様に、諸前提から結論への同じ種類の漏れを見る：つまり、前提が結論を含意しているのである。演繹的—法則論的推論は、それを許さない、というのは、その二つの構成要素の間には完全な独立性が存在するのだからである。

von Wright は、様相論理 modal logic から義務論理 deontic logic を展開し、その領域における彼の行なってきた努力を次のように要約している（1983: vii）：

私が研究してきた実践的推論の類型は、概略的には、次のように説明できる：ある行為は、「結論」“conclusion”として、ある動作主の目標や目的に関係づけられており、手段に関するその人の意見は、「諸前提」“premisses”として、その達成に関係づけられている。その行為が既成事実 *fait accompli* である時、推論の格 schema は、行為の説明を与える。格の構造とそこにおける前提と結論の間の結びつきは、しかし、大いに問題である。

彼はまた、実践的三段論法と全体をおおう法則モデル^[6]の間の彼が提案した類似性のなかに問題を見出している（1983: viii）：

誇張であるが、次のように言える。人間諸科学におけるすべての説明はとても、行為 *action* の説明になっていない——個人的なものにせよ集团的なものにせよ。そして、すべての行為の説明はとても、実践的推論の型と一致しない。そればかりでなく、行為は、第一に、意図的 *intentional* 行動であるけれども、意図的行為のすべての形態が動作主の意図 *intentions* から発するわけではない。意図的なもののずっと広い範囲が、本当に徐々に私にとって明らかになってきた。ところが、意図を行為と結びつけて、「実践的推論」“practical inference”という項目の下に私が論じてきた目的論的格 teleological schema の類型は、やはり私には、行為の説明の分野において枢軸となる位置を保持するよう思われる。

1983 年の本は、さらに続けて、1971 年の本で初めて探究に乗り出した後で彼が見出した諸問題に焦点をあてている⁽¹⁰⁾。

さて、Nerlich（1990）によって開けられた窓を通して今や非常に容易になっているのであるから、過去 1 世紀を手短に振り返るべき時である。

19世紀における言語学と言語変化のより良い理解のために、彼女は次のことを明らかにしている (p. xi):

Whitney, Bréal と Wegener は、その問題に対するそれぞれの回答において一つの点に収束する: 即ち、言語学者が言語を自律的実体 *autonomous entity* とみなすことを止め、あるいは、当時流行した言い方では、言語をその言語の使用から独立して生き、そして死ぬ有機体 *organism* とみなすことを止め、その代わりに、Whitney によって提唱されたように、行為 *actions* に焦点をあて、そして、Bréal によって強調されたように、使用者の精神 *mind* に焦点をあて、同時に、Wegener によって推奨されたように、使用者がそれを用いる場面 *situation* にも焦点をあわせる時に初めて、その問題は解決できるということである。

このように、100年前には、次のことはまったく明らかであった、即ち、歴史は自由な動作主の合理性に適合すること、言い換えれば、人間行為の諸法則は変化を説明するということである、というのは、人間行為は、絶えず変化しつつある必要と移り行く好みに表現手段を適応させて、ある明確な目的をめざす合理的行為だからである (1990: 108; また 7, 8, 19, 35, 68, 79, 101-102, 119, 150, 153, 172-173, 177, 180, 192 も見よ)。従って、言語学者たちが行為の役割を見過ごしてきたことは、二重に当惑させる事態である、というのは、それこそが近代言語学の基盤にあったのだからである。この中心的重要性を持つ説明的側面は、構造主義と生成論的局面において見失われた、そこでは実践が理論であり、記述が説明であると宣言されたからである⁽¹¹⁾。

理論的には、次の三者は常に解釈学の名の下に共に歩んできていたのだけれども、Leff (1971: vii [書かれたのは1968]) は、「歴史、哲学、そして、社会的諸研究の間には実質的には何の関係も存在しない」と断言できたのである、ただし、それらの問題は当時必ずしも大きい影響を有してはいなかったが (von Wright 上掲書参照) (p. ix):

私が主張しようとするのは、人間にかかわる事柄における統一性の欠如が単に歴史の本性にとって中心的であるだけでなく、それが歴史を人間研究にとって中心的にする、ということである。歴史は、偶然的なことを扱う。その判定基準は質的・定性的である。それは、単に何が起こったかだけでなく、それがどのようにして起こり、また、起こる必要がなかったかにも注意しなければならな

い。それは、単に何が事実であったかだけでなく、人々が何を事実であると受け止めたかをも扱わなければならない⁽¹²⁾。

von Wright の指摘によると、もし具体的な歴史的出来事の中に全体をおおう諸法則が存在するとすれば、それらの法則はむしろ、社会学の、それら自身概念的あるいは解釈的側に存在する一般的法則の具体的事例であろう（1983: 51）という（p. 52）：

社会的「諸法則」“laws”は、経験からの一般化の結果ではなく、具体的歴史的場面 situations の解釈のための概念的図式 schemata である。それらの図式の発見と言うよりむしろ、創出は、概念の分析の問題であり、それらの適用は、場面の分析の問題である。そういうことであるから、人は、社会的研究は哲学と歴史の間の中間的位置を占める、ということが出来る。それは、この二つの極の一方あるいは他方の方向へ動くことが出来るが、しかし、哲学と歴史の双方から断絶したところで自足的生を生きることは出来ない。

同じことがもちろん、一つの「社会的制度」“social institution”である言語にも当てはまる。

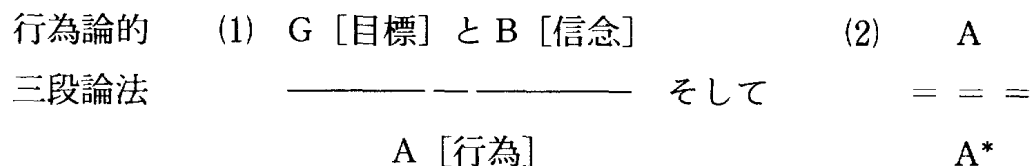
しかし、歴史に戻ろう。歴史においては、場面の分析は非常に豊かな一団の要因と条件を我々与える。Martin は、実践的推論を第 10 章（pp. 185-214）で扱い、それから進んで、「他の時代、他の文化」“Other Periods, Other Cultures”（215-240）を論じ、そこで、すべての種類の適切性 appropriateness の条件を導入する。彼の要約は次の通りである（p. 246）：

実際、私は、前以て想定されている一般化はたぶん、時代によって、さらには歴史家によってさえ、さまざまであろうということを強調することは価値のあることと思う。私が主張してきたことは、適切性の規則——とくに何かの規則を特定することはしないが——が、歴史家によって与えられる説明的記述において確実にある論理的に不可欠の役割を果たすということ、そしてまた、それらの一般化が超歴史的 transhistorical 適用を持つにちがいないということである。しかし、その点ではるかに重要なことは、実践的推論自体の格である。というのは、それが歴史家の説明的実践のための客観的枠組みをたしかに提供するからである。それなしには歴史家にとっての談話の世界 universe of discourse は全然存在しないだろうし、また、歴史的探究を一つの科学と呼び、あるいは一つの学問とさえ呼ぶことの出来る現実的意味も存在しないだろう〔強調は引用者〕。

ここでの「科学」‘science’は明らかに、*ἐπιστήμη*、あるいは *Wissenschaft*

の意味に取ることが出来る（上述の科学としての現象学を参照 [本訳文 186 頁]）。

我々は今度は、Esa Itkonen に向かう。彼は、始めから von Wright の議論に従い、その議論を理論言語学に適用してきた極めて少数の言語学者の一人、たぶん唯一の言語学者である^[7]：人間行為は、実践的必然性を明示する、ただし、それは、もし人がある明確な目標を持ち、それを達成するために必要なある行為が自分の自由になると信じているならば、人はその行為を遂行するに違いない——もし人が合理的人物である（そして、もしその行為が道徳的あるいは他の価値体系と自由意志に抵触しない）ならばであるが——という意味においてである。これは、次のような仕組み (Itkonen 1983: 49–53; 「実践的必然性」 ‘practical necessity’ から) における (2) である：



我々は、(1) 人の目標と信念 (G & B) に由来する必要な行為 (A) の心的表示を持ち、それから (2) 思考から行為への、即ち、A から空間時間的行為 A* への動きを持つ。信念と行為の間の結びつきは、概念的 *conceptual* である（そして、これがまた、(1) において破線となる理由である。それは、規範 *norm* の下での妥当な推論を表す）。信念は信念で、主として仮説形成の力を通じて確立される。

Itkonen は今やそれを次のように簡潔に要約できる：人間行動は、動作主の目標と信念から生じてくる。目標は、自由意志によって、また/あるいは外的状況によって促され、行為をもたらす際の「動的原因」 ‘dynamic cause’ の役割を持つが、他方、信念は、意味的記憶、心的表示等を構成し、「静的原因」 ‘static cause’ として作用する。行為は一般的には合理的である、つまり、目標と信念に照らして妥当である、そして従って、合理性は、事柄を引き起こすという前理論的意味における因果性の役割を引き受ける。合理性の範囲内で、人は、社会的に妥当な合理性諸原則とそれらの個人的・心理的内面化 (= 諸理由) の間の区別をすることが出来る。合理的行為は、問題に対する解答、つまり、矛盾を消去する試みである（「混乱」

“disturbance” の解釈学的消去、仮説形成一般、そして、不一致理論 *dissonance theory*^[8] を参照せよ)。説明の基礎としての非法則的 *non-nomic* 合理性がいかなる形でもなしで済ませることの出来ない領域は、歴史的変化（と科学的進歩）の領域である（Itkonen 1983: 201-211）。

再演

しかし、我々は、三段論法の格の側面で余り先にまで進んでしまった。バランスを取るために、Collingwood の再演 *re-enactment*、これはもちろん Plato の解釈学的 *ἀνάμνησις* を言い換えた形であるが、その概念に戻らなければならない。Collingwood は、すべての社会諸科学の背後にあるのだけれども、歴史にとくに適切であるとして再演の概念を強調するが、しかし、社会諸科学で利用することは容易であった、というのは、それはすでに歴史においては、実践的にも理論的にも、受容されていたからである。再演による説明は、彼にとっては、歴史的説明のパラダイムの、言い換えれば、論理的に通常の・規範的 *normal* 事例であった（Martin 1977: 47）。アナムネーシス・想起 *anamnesis*、つまり再演は必然的に、首尾一貫した物語的記述 *narrative account* につながって行き、そこでは、成程と思わせる話が実際に理解を生み出すのである（*history* と *story* の語源的同一性を参照せよ！⁽¹³⁾）。ある行為は思想によって決定されなければならず、そのことは実に、歴史と解釈学の同一性を示すのである（Martin 1977: 54）：

再演による説明は、次のような場合に、完全で、満足すべきものとなる、即ち、研究者が「証拠の解釈」“*interpretation of evidence*” を通じて動作主の思考の諸要素を収集し、それから、当該の遂行が、結局は、それらの要素と関係する行為のもっとも納得の行く推移であることを示すことによって、Dray の言い回しを借りれば、「なされたことの理論的根拠 *rationale* を示す」場合である。帰納的再構成と感情移入的熟慮は、再演による説明の Collingwood の理論の二つの論理的次元である。帰納的再構成が歴史家の記述の年代記 *chronicle* の要素を提供し、感情移入的熟慮が物語 *narrative* の要素を提供する、と言って良いだろう。感情移入は、起こったことのもっともらしさを示すことによって再構成を完全なものにするが、しかし、説明は、もっともらしくはあっても、もし帰納的構成要素が真実でなければ、正しいものであることは出来ない。歴史における理想は、諸事実を結びつける物語を提供することである。

今や人は、この種類の解釈的構造が単に歴史のものであるだけでなく、すべての意味の基礎であることを知ることが出来る。それは明瞭な形で、Itkonen (1983) の扱いに現われている：記号の表示 (38-40) は、我々が上で行為論的三段論法に見たように、記号学的、語用論的意味の基盤として「凍結した行為」‘frozen action’を必要とする (152, 166, 171-172)。文の意味は、原理における検証 verification-in-principle の見地から解釈される (p.135)。これは、決定的に重要な観念がここでも首尾一貫した物語であることを含意する (81, 85, 104, 120-121, 126-127, 151, 154, 167, 184; Martin 1977: 55, 62, 70, 87, 92, 96, 213 参照)。意味は従って、(再)演であり (re-)enactment (p. 196 参照)、また、解釈学および歴史的研究一般と実質的には同一なのである。それはまた、意味一般の分野の論理学者の扱いにも現われる (Ushenko 1958)。原理における検証は、案出された言葉の語用論と、言語学で非常に好まれている (180-181) 明確な事例の原則 clear-case principle の直接的説明を与える (p. 81)：つまり、これはまた、潜在的検証の物語の側面 story aspect の基礎になっており、そして、超越的演繹の概念的必要性の領域に属しているのである。私は付け加えて、「枠組み理論家」“frame-theorists”が、古い解釈学的あるいは再演の伝統に言及することはないけれども、類似した (同じ?) 結論に達していると言いたい。以上のすべては、意味のまさに本質は変化である (Shapiro 1985, 1991) という記号学とも一致する。言語学者が歴史と意味の本質を避ける理由はまったく存在しない。彼らがそうしていることは、流行のパラドクスの一つである。

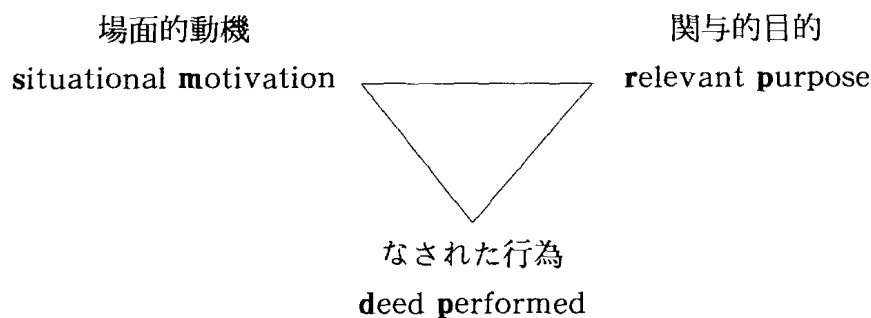
Martin (1977) は、「説明の不可欠のモデルは、von Wright の図式が物語的理解の Collingwood の判定基準に従って適用されているものだが、歴史における説明のためのモデルとして特にうまく適合されて役に立つと強く主張してきて」(p. 96) おり、彼は続けて言う：

私の主張点は、行為説明の観念や形式がこの格・図式 schema において与えられているということである。このレベルにおいて、我々は、あらゆるそのような説明の基礎的輪郭を知るのである。というのは、この格の見地からこそ、我々は、行為がある意図された目的への手段として、あるいは、その目的達成の一部として、等々として考察されているという考え方を提示するのだからで

ある。しかし、諸事実 *facts* が与えられた説明においてその格を満足させるものと判定されるためには、我々は、それらの事実を格における諸要素の実例として見るばかりでなく、具体的な形で、理解可能な連関を明示するものとしても見なければならない。

Martin は、上述のこのために説明の三角形を提示し (p. 69; Collingwood 1946: 245) ており、続けて言う (p. 149):

そこで、適切性の主張は、非常に高度だが経験的に空虚な説明的図式と明確な一団の利用可能な証拠との間の中間に位置する論理空間で働くものと見ることが出来る。その図式は、もし説明が承認されるべきであるとすれば保持しなければならない種類の関連を特定する。ここで、心に次のような図形を思い浮かべることが役に立つだろう。[太字は引用者]^[9]



その一団の証拠は、理解の検証、再演の検証を受けて、図式の諸項を満足させることが出来る内容の細部を提供する。適切性の主張は、利用可能な証拠と一致する図式の特定の例示を有効なものとするが、それは、その証拠によって与えられている特定の資料の間のそれらの特定の関連を保持することを理解可能あるいはもっともらしいものとして保証することによるのである。

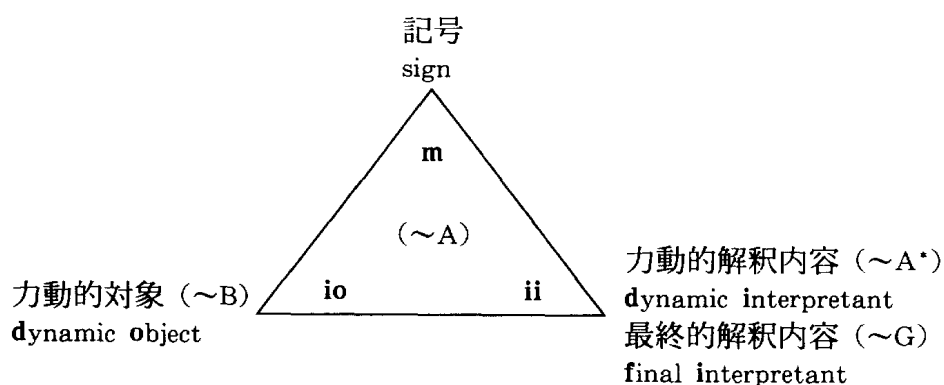
Martin の本のタイトル [*Historical Explanation: Re-enactment and practical inference*] がこの本質的結合についての彼の主な主張内容を正確に映し出していることに注意してほしい。それだけでなく、彼は、自分のモデルと Hempel のモデルの間の根本的違いを指摘する。Hempel は、演繹的確実性によるにせよ、帰納的な高度の蓋然性によるにせよ、説明されるべき行為を諸前提から引き出すという論理的操作を用いた。Martin のモデルは、文脈の中での図式の具体的例示を提示するのである。

注目する価値のあることだが、上掲の Martin の三角形は本質的に、Itkonen の行為論的三段論法と一致する、なぜならば、それもまた三角形として考えることが出来るからである。たまたまそうになっているのだが、三

角形の頂点は異なった種類になっている、しかし、そのことはどうでも良いことである、なぜなら、人は三つの部分の結合をこそ必要とするのだからである。場面的動機は、信念体系と他の文脈に対応する。これは、漏れ穴のある論理が作用するところであり、そして、それは仮説形成を意味するし、また、これまで考えられてきたよりも大きい程度で帰納をも意味する (Savan 1980)。文脈の中に状況と目標を意味あるものにしようとする動作主が存在する、言い換えれば、我々は、合理的行為、プラグマティズムを扱っているのである。これはまた、百科辞典的知識が入ってくるところ (Boeckh 1877)^[10]、解釈に必要な随伴経験 collateral experience が入ってくるところ (Savan 1988, Anttila MS 1989) でもある。

記号学的展望

しかし、言語記号はどこに行ったのか。上述のすべての背景を知ること、もちろん十分なのである、なぜなら、文脈全体が記号の一部だからである。記号は、これらの三角形のなかに存在し、そして、行為論的三段論法の表示の側面は、まさに人が予想するだろうように、それへの橋渡しを与える：つまり、人間の経験と行動が記号の支えであり滋養物でなければならないのである。記号の三角形は通常、その媒体 medium (**m**) と形態を上におき、直接的対象 immediate object (**io**)、記号が対象を具体化するやり方を左におき、そして、直接的解釈内容 immediate interpretant (**ii**—諸概念が下の記号三角形のなかにはまるように、省略形が必要である)、記号に表示されているものとしての意味を右において描かれる (ここに出てきた諸概念については、Savan 1988 を見よ)：



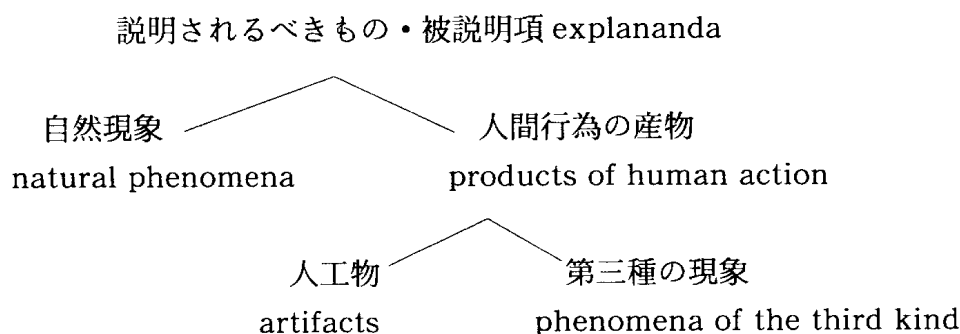
私は、この翻案、即ち、文脈の中での動的組み替えが基本的には正しいと信じている、ただし、すべての図形と同様に、それはもちろん余りに単純である（記号～は、その関係を示す）。記号は、経験の一種の化石化であり、そして、シンボルは慣習による記号であるから、それらは社会的「制度」“institutions”である。力動的対象は、すべての対象領域、つまり、記号の発出者としての話し手を含め（Savan 1980）、物理的現実をおおう。話し手による文脈の中での使用は必然的に、変化へと通じて行く、なぜなら、意味はすでに変化だからである、そして従って、歴史との衝突は存在しない、というのは、歴史が今や第一位だからである。記号関係における簡単な再合成 recolligation は通常、言語学では名義論 onomasiology と意味変化論 semasiology として認められているが、しかし、我々はそれがずっと深いところまで進むものと見ている。問題は、今日そうではないとしても、100年前にはまったく明瞭であった。Whitney と Wegener は特に、言語の変化可能性を言語記号の慣習的、恣意的性質によるものと理解していた、即ち、「もし記号が恣意的、慣習的でなければ、言語は、学習可能でもなく、理解可能でもなく、変化可能でもないだろう」（Nerlich 1990: 81; 28, 30, 111, 129, 137, 163 も見よ；Keller 1990: 17）。解釈内容はここでは、簡単な扱いを受けているが、しかし、それらはシンボルを確定する創造物である、即ち、「すべての論理的諸原則の第一のもの」はここに存するのである。歴史的復元はもちろん、解釈であり、超歴史的意味論を実践することであり、言い換えれば、異なった構成要素を元の言語共同体へと同化することである。これは決定的な形で、話し手の元の共同体を延長する行為である（Anttila MS 1989 参照）。

「歴史的命題は常に文脈に左右される」（Leff 1971: 66）。「歴史的説明の必要が生ずるのは、まさに連鎖において断絶が存在する場合であり、革命が起こったり、小さい出来事が大きい帰結に通じて行く場合である」（p. 67）。今、そのような小さい出来事をカタストロフと呼ぶことが、言語変化においてさえ、流行である。それらの断絶は、上で見たように、筋の通った語りを要求する。文脈上の必要要件は、Whitney, Bréal, Wegener にとってはまったく明瞭であった、即ち、Peirce が随伴証拠とか経験とか情報と名付けた側面である（記号三角形の左下の角である。Anttila MS 1989

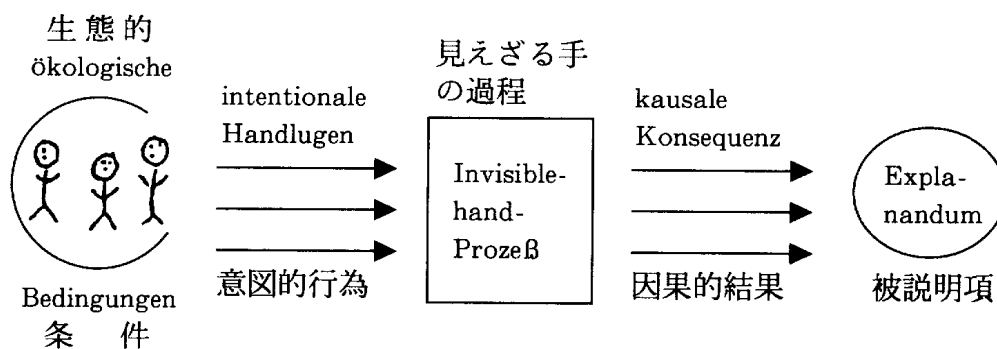
を見よ)。文脈の中で学習することが、変化にとっては常に決定的に重要である、なぜなら、Peirce が言ったように、文脈は記号の一部だからである。そうであるから、文脈は記号の曖昧さを解消するのである。語は、その全体的環境から指標記号的に意味を吸収するのである。意味の構成は、*Umgebung* と *Umwelt* の両方、つまり客観的場面と主観的場面の点から見た文脈の中で起こる (Nerlich 1990: 73, 88, 99, 124, 138, 160, 177, 184, 189)⁽¹⁴⁾。そのような条件の下で言語を使用し学習することは実は、文脈の中で不断に実験を行ない、問題解決を行なうことである (Nerlich 1990: 101, 167, 181; Keller 1990: 186, 187)。そして、我々は、より現代的出自の意味の不一致理論^[11]に立ち戻っているのである⁽¹⁵⁾。

行為の集団的側面

合理性原則は、個人の動作主が利用する合理的行為の集団的側面を導入し、そして、言語共同体という概念は、同じことを要求する。我々は、歴史において、また特に言語変化において（その社会的統御、つまり、諸個人に社会的規範と共通の信念を持ち続けることを強制する非常に強力なフィルターが存在するために）集団的動作主によってなされる行為について語る。これはまさに、話すことの慣習に当てはまる、なぜなら共同体全体がその言語を変えるように思われるからである。集団的効果を扱う際の問題は、諸現象が人間行為の結果であるが、人々の意図の目標ではない（例えば、インフレーション、株式市場、人口増加、交通渋滞）ことがあり得るかどうかである。そのような現象は第三の種類のものである (Rudi Keller):



18 世紀スコットランド啓蒙の哲学者たちは、それらの現象に関心を持ち、言語をそこに含めた。中心的問題は結局のところ、社会的諸制度の原動力であった：「文明言語の構造において我々が賞賛する体系的美しさはどこから生じてきているのか。[...] 異なった科学、そして、異なった技能の起源はどこにあるのか」と Dugald Stewart は問うた (Keller 1990: 54-55)。歴史を助けにすることが出来ず、人は事実の場所を推測で埋め合わせなければならないというのが答えであるから、我々は、理論的あるいは推測的歴史 *theoretical or conjectural history*^[12] を持つことになる (53-57, 98)。奇妙なことだが、問題は詰まるところ歴史的なものではなく、社会現象の理論的探究にかかわるのである (153-154)。これは、統一性理論 *coherence theory*、あるいは原理における検証のもっとも早い理論的陳述とみなすことが出来る。見えざる手による説明は従って、仮説的再構成である。Adam Smith は、そのような集団的帰結の背後に働いている見えざる手 *invisible hand* という用語を作り出した。Keller (1985: 229, 1990: 121; Nerlich 1989: 163-6 参照) は、次のような図形にその過程を要約している：

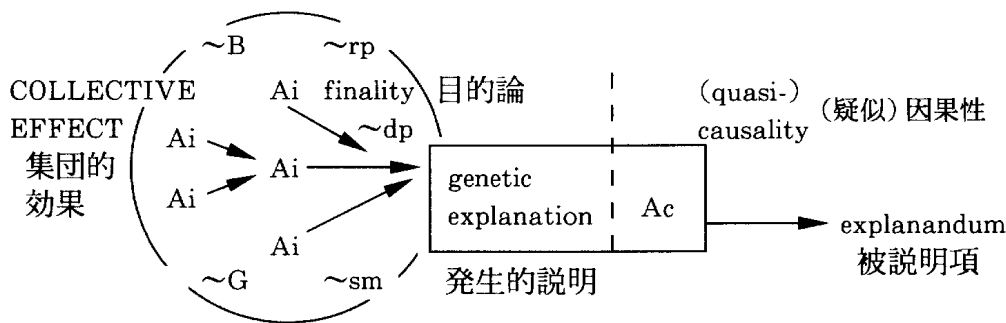


理念的には、見えざる手による説明には三つの段階がある (Keller 1990: 95)：

1. 動機、意図、目標、信念（等々）の描写、あるいはむしろ名付け、そして、それらの動機などは問題になっている現象の産出に関与した諸個人の行為の根底に横たわるもので、それらの振る舞いの限定条件を含む。
2. 諸過程の描写、これは、明らかになりつつある構造に対して起こる多数の個人的行為から生ずるものとして捉えられる、そして、

3. それらの行為を通して生み出された構造の描写,あるいはむしろ名付け。

主要な強調点は、すべての生態的条件と社会的相互作用等の諸原則とを解明することにある、これはまさに、歴史的図式の場面的動機づけの場合と同じである。別の形で図形を繰り返せば：個人の行為 (A_i) は、集団的集成体 (A_c) へとはめ込まれることになる。これは、目的論 finality とその結果生ずる擬似因果性の間の発生的説明である (Anttila 1989a: 408 参照)：



(この図形はここでもまた、von Wright の図形^[13]と明白な類縁性をもっている。) Keller の扱いは徹底しており、エレガントである。私は、それが値するように詳しく説明できないが、しかし、私は、最終的判断として、言語変化が社会文化的変化の特殊事例である (91, 179, 192) ことを指摘しておきたい、そして、Keller は、見えざる手による説明が言語変化を説明する唯一の形式であると述べている (p. 194)。すぐれた見えざる手による説明は、厳密な意味での説明である。予測可能性は欠けているが、しかし、それは、法則の欠如の問題というよりむしろ、諸前提の実現がそれほど明瞭でないからだ、ということである、つまり、我々は、説明されるべきもの、法則を知っているのであり、そして、その諸前提を再構成するのである (p. 101)。これは、歴史とフィロロギーにおける絶えざるディレンマである。

Keller の考えでは、言語をコミュニケーションのための用具として考えるのでは十分ではない、なぜなら、より重要なのは、影響を及ぼすための道具としての言語であり、そして、(変化にとって) 重要さのもっとも少ないのは、シンボルの、あるいはコードの体系としての言語だろうと思われる。

るからである (128, 192)⁽¹⁶⁾。

行為や解釈はもちろん、間違ふことがあり、そして、誤解は常に、解釈学における一つの問題であり続けている。しかし、それはすべての解釈における問題である。いかなる偶然の出来事も、社会や記号体系のなかへ組み込まれることがあり得る。文化の側面からの実例を挙げれば、San Ildefonso の Pueblo の陶器の壺のそれであろう。かつて、二つの壺が偶然に焼いている間に赤ではなく黒になった。この改新は、プエブロ共同体の外部で受け入れられ（例えば、Anttila 1989a: 380 を見よ）、それから内部でも受け入れられた。言語構造において、そのような偶然事は、変化においてはありふれている。文脈のなかでは、それらの偶然事は、もし我々が十分な証拠を持つならば、合理的で、意味明瞭で、理解可能である、そして、我々が十分な証拠を持つ時、我々は、首尾一貫した物語を作ることが出来るし、または、重要点を原理において検証できるのである。

フィロロジの普遍性

首尾一貫した物語を再構成することはもちろん、説得力のある、あるいは調和のとれた全体に細かい部分を溶け込ませることを意味する。これは、フィロロジが、明示的に中心的な歴史的な努力として、常に行なったことである。今や、類似したいくつかの共時的理論が存在する、例えば、認知的不一致 cognitive dissonance の理論 (Itkonen 1983: 205-6) と型による説明 pattern explanation^[14] (Itkonen 1983: 248-60; Anttila 1988) である。後者は特に、フィロロジと一致するが、その理論はすでに Boeckh (1877)^[15] によって十分に説明されたものである。Harvard 会議は、1988 年 3 月にフィロロジを正確に概説した (Ziolkowski 1990 を見よ) が、それは、重点が文学理論におかれているとはいえ、フィロロジの概念のアメリカにおける理解、あるいは自覚への重要な片鱗をうかがわせている。「会議では、フィロロジを言語学と等置することは、何の異議もなく退けられた、[...] 会議の大部分は、書かれた諸記録の『真正性、意味、等』を [...] 決定する際のフィロロジの有用性を評価することに費やされた」(p. 6)。フィロロジが単に（文学理論にとって）基盤的、補助的領域であるとされるのかどうかを論ずるのに相当の努力が注が

れているが、しかし、次のような重要な声も聞かれる、即ち、フィロロジューは直接的な理論的意味合いを提供すること、また、「フィロロジストは、最近彼らが排除の犯行者ではなく、犠牲者になってきているという説得力のある論を唱えることが出来るだろう」(p. 10) ということである。脱構築主義がほとんど全員一致で拒否されているのは適切であるが、ただし、Paul de Man の「理論において真に根本的な radical ものはフィロロジューである is」(p. 29) という主張は正しい。それはこれまでも常に正しかったのである。一つの概念の歴史がどれほど解明的であるかが Margaret Alexiou の寄稿論文に現われている (56-57):

幸いなことに、フィロロジューと理論の間の現在の分極化を誤りとして拒否し、中道ではなく、異なった種類の解決を求める多くの人々——創作家を含めて——が存在する。*philologia* という語そのものの歴史に関するいくつかのコメントは、すばらしい出発点を提供することが出来る。古代ギリシア人においては、その語の意味の範囲は、「議論、推理することを愛すること」“love of argument, reasoning” (Plato), 「学識のある会話」“learned conversation” (Athenaios 著 Antigonos Karystios), 「学ぶこと、文学を愛すること」“love of learning, literature” (Isokrates, Aristotle [...]) [...] を含んでいる。

philologia のこれらの古い意味を、この語がすっかり消えてしまったり、現代の口語的意味に縮減してしまう前に、復活させるべき時である。啓蒙運動以来の人文諸学の内部における学問の増大しつつある専門化は、それと共に、その結果として言語と文学の研究がより科学的になったという仮定をもたしている。それはどれほど真実なのか、また、どのような変化を我々はこれからの数十年間に期待して良いのだろうか。

そしてまた (p. 60):

積極的な調子で結論を述べれば、フィロロジューは、「議論と推理することを愛すること」“love of argument and reasoning”, 「学ぶことと文学を愛すること」“love of learning and literature” というそのもっとも古い意味に立ち戻ることによって地平を拡大し、書かれたテキストばかりでなく口承のテキストも含め、文学の実践家と理論家を再び結びつけ、詩と音楽の全体性をもう一度求め (これはギリシアや多くの非西欧文化では決して失われていない)、そして、人間文化の相互作用の美しさと多様性を認めなければならない。

我々には、この初期の概念が上で Peirce から引用された論理に対する概念とほとんど同一であり、また、型による説明に近付いていることが分か

る。Alexiou の立場は、*lógos* (語, テクストであるが、それに我々は、論理や理性を付け加えることが出来る) に対する *philia* [愛情] 関係のために主張している Richard F. Thomas によって繰り返されている (p. 69)。そして、彼は次のように付け加えている: 「現在行なわれている議論において、フィロロジがどういうわけか狭く受け取られていることは、奇妙なことである、そうではなく、私には、フィロロジは、それが扱うテキストが生み出すすべての疑問と同じほど幅広いものであるように思われる」。そのような狭さに対する非難が今日どれほど真実であるかは、人文学系の学部長たちでさえしばしば、輝かしい言語学者ではなくフィロロジストではないかと疑われる人々に対してそのような姿勢をとるという事実によって知られるのだ! それに対して逆に、統語的樹形図を分析することは、人間精神と歴史の深みに触れることであると受け取られているのである。言語と歴史の間のクッションとしてのフィロロジは、数学と現実の間の橋渡しとしての現象学を思い起させるのである。

純粋な言語学にもっとも近いのは、Calvert Watkins の寄稿論文「フィロロジとは何か」“What is Philology?” (21-25) であるが、その中で彼は次のことを我々に思い起させている、即ち、大多数の言語学者は不満もなくフィロロジをやっていること、そして、彼らは、文脈が重要である領域ではそれをやらなければならないということである。フィロロジ的学問は、歴史と言語の事実との間の特権的道である (Rion 1987: 6)。Harvard 会議から、我々は、「言語学の目的は歴史である」“Der Zweck der Philologie ist die Historie” という Friedrich Schlegel の金言に言及している Eckehard Simon を引用することも出来る (p. 18)。Schlegel は、「言語学の哲学」“philosophy of philology” を擁護したことで有名であるが、それはまさに Boeckh がしたことであった。Boeckh の名前がまったく出てこなかったのは奇妙である。彼なら、理論としてのフィロロジに対して十二分の支持を与えたことだろう。そして、それは、必要な変更を施せば、言語学にも広げることが出来るのである。文脈的意味の要件と文脈における解釈、問題解決、そして、上で挙げたように、第一位のものとしての歴史、歴史的分析において必要なさまざまな適切性原則は、すべてフィロロジ的概念でもある。

本論文で手短に輪郭の描かれた諸観念は、自明であろうか。恐らくそうであろう、あるいは、少なくとも、そうであるべきである。それらの観念は、言語学における、特に歴史言語学における基礎的能力の一部であるはずである、ところが、言語学において人は、歴史的説明の議論や歴史の哲学に出会うことは事実上決してない。その代わり、さまざまな形式化 formalizations が説明として提出されており、時には、類推と仮説形成のようなどこでも起こっている現象が形式化できないという悲嘆の声を伴っている。これはだから、それらが説明に正統的に用いることは出来ないと言っているものと考えられる。そのように言うことは、単に共時的/記述的言語学の実行可能性を否定するばかりではない、それだけでなく、それならば、そもそも歴史言語学をなぜ歴史的 *historical* と呼ぶのか、ということになる。しかし、「理論的」“theoretical”) 真理として、歴史言語学はメタ理論的に歴史、語用論等から、つまり、文脈から切り離すことは出来ないのである。そして、以上のすべてに対して、フィロロジーには堅固な理論が存在しており、フィロロジーは従って、現在行なわれている形式主義的言語学より良く変化と歴史的過程を説明することが出来るのである。歴史は理論的には、言語とその使用の事柄においてもっとも重要な位置を占める——共時言語学は、必要ではあるけれども、実際の便宜のためのものである。シンボルの構造そのものが、それに内在する目的論と共に、そのことを示している。歴史言語学は基本的に合理的説明に頼らなければならない。これは、正当な文脈における「とんでもない」“crazy” 解釈でさえも合理的であり得ることを意味する (Itkonen 1983: 187–188, 203; Anttila 1989a: 406–407 を見よ)⁽¹⁷⁾。

注

- ⁽¹⁷⁾ 例外に出会うことは非常に難しい。一つは、Rion (1987) であるが、言語学雑誌の特集号である。この特集号はほとんど完全にフランス語圏のもので、そこでより容易に利用できる、例えば、英語やドイツ語の参照文献に対する価値ある補足を提供している。——二重名称の時代において、「歴史—言語学」“histori[c]o-linguistics” は生じていないことにも注意しよう、明らかに歴史言語学がその分野を扱ってきたはずだからということである。しかし、実際にはそうではなかった。ドイツ語の *Sprachgeschichte* [言語史] は、

それと比較するとすばらしい用語であり、それを示すさまざまな結果がみられる。

- (2) ここで関連する問題は、彼女の最後の章（239-289）「社会言語学理論の認識論的地位について」“On the Epistemological Status of Sociolinguistic Theory”で頂点に達しており、その章自体が科学主義を避け、非演繹主義的認識論を展開することの申し立てにまで高まっている。
- (3) 古い自然科学の欠点のない顔は崩れつつある、例えば、Lenk（1986）と von Wright（1986）を見よ、これは非常に読みやすい記述である。
- (4) 現在の支配的理論の理論的ヘゲモニーは、当然ながら、二つの面からの問題に直面しているように思われる。一方では、言語学的（変形生成的）形式主義は、ますます激しい全般的批判を受けている、例えば、De Haan（1988）であるが、これは生成文法が衰えを見せない支持を受けている国から現われているという点で、意味のある著作である。批判的見解は他の場所ではしっかり続いてきている、例えば、Itkonen の研究において。他方では、個々の原則への詳細な吟味が、美化されていた泡を破裂させている：Sullivan（1989）は、最新のものの一つであるが、『かの有名な』[支配と束縛]理論の基本的公準が論理的に、経験的に、あるいはその両面で、根拠の薄いことを明らかにしている。[...] そればかりでなく、明らかに、『かの』理論は言語の理論ではなく、言語の構造のいくつかの部分の理論なのである。それらの欠点を加え合わせると、我々は本当のミステリーに到達する：つまり、なぜ人が言語理論へのこのアプローチを言語の記述に適用しようとするのか、である」（p. 66）。我々は、これが理論ではなく、むしろ上手くいった宣伝と社会的成功であるというしばしば指摘される事実に達する。理論は本来の歴史言語学の内部に横たわっている。この点に関するもっとも新しい見解は、Keller（1990）であるが、彼は、生成「理論」“theory”における内面化された文法への排他的集中が変化を扱う能力のまったくの却下を意味する（163-164）ということをもっと我々に思い起させている。彼はさらに、これがまさに自己限定であり、生成論者が学者の共和国で多数派を握っていない限りでは、危険ではないだろう、と言う（p. 159）。もちろん彼らがたしかに多数派である局所的領域が存在し、その結果は実にひどいものである。
- (5) 私はここで、これらの問題の歴史を述べることはしない。（概念の歴史ではなく）議論については、Leach（1967）、Martin（1977）、また Mandelbaum（1977）を見よ、そして、Anttila（1976）参照。
- (6) 場面的動機づけも、とりわけ Gallie（1968）において重要である。
- (7) 基礎的な仮説形成的型は、Kapitan（MS 1989）によってさらに詳しい説明がなされている。
- (8) 一般的にはここでも、人は、共時的意味におけると同じ構造を見る、例えば、会話分析のレベルにおいて：ある質問とその構造は、答えの多様な可能性を

開き、そして、その答えは、質問のいくつかの可能な形を明らかにする。

- (9) この立場は、変化を真剣に研究する人々の間でだんだん強い支持を得つつある、例えば、Keller (1990) であるが、見えざる手による説明においては、本質、変化、そして生成が密接に結びついていることを正しく強調している。ある項目の起源を説明することは、同時に、機能的説明を与えるのである (特に: 100, 114, 120)。
- (10) 相当の量の文献がこの話題に関して現われており、そして、それをここで概観することはもちろん出来ない。ペーパーバックで入手可能になっているものでは、人間行為一般については、例えば Langford (1971), また、例えば、義務論理については、Lenk (1974), そして、行為一般については、Lenk (1977-84) がある。後者は、6冊の本からなる信じ難いほど包括的な著作である。編者は序文で次のように述べている: 「行動の科学 Wissenschaften vom Handeln, 行為科学 Handlungswissenschaften の学際的統合の困難は、巨大である。観点があまりにも多様なのである: 行動、と言うよりむしろ行為の条件、要因、部分的問題は、次のような諸学者によって分析されている、即ち、心理学者——とりわけ、動物心理学者と発達心理学者、グループ・ダイナミクス研究者、社会心理学者と学習理論研究者としての行動心理学者——、社会学者、文化人類学者と民族学者、動物行動学者、言語学者と比較言語学研究者、また、法学者、道德哲学者、社会哲学者、行為哲学者、狭義の行為論理学者、価値論理学者と規範論理学者、システム科学者と計画科学者、政策決定理論研究者と数学的ゲーム理論研究者、経済学者、政治学者、歴史家、さらに、人間生物学者、遺伝学者、自然人類学者、分子生物学者、神経学者、神経生理学者、バイオ・サイバネティック研究者、労働生理学者、心身医学者、精神科医、等、等である。」[強調は引用者] 最初の貢献は当然ながら、von Wright によるが、私は、実践的三段論法の多くの形を論じている Waltraud Brennenstuhl による第二の貢献に注意を促しておきたい (1. 35-66 [1980])。
- (11) Rion (1987) 所収の Guy Jacquois を参照せよ、彼は、二つの種類の「歴史の拒否」“refusal of history” を論じている: 「確立された歴史の単純な却下に基づくことの多い「構造主義的」“structuralist” 拒否、そして、「生成論的」“generativist” 拒否で、これは、単純な無知と見下し、あるいは、自らの疎外の意識の欠如に基づくように見える」(p. 50; 要約から引用)。
- (12) これらが仮説形成的改新において言語学者が扱わなければならない要因そのものであることに注意してほしい。
- (13) 過去 1, 2 年の間に、「物語」“story” が生成主義出身の言語学者において新しい流行語になっている。彼らは今なら、例えば、「そのことに対する私の物語は、...」“My story for that is ...” と言うだろうが、それはほぼ「説明」‘explanation’ のことを意味している。これはまず間違いなく、より以前の専

門的用法とは関係がない。それは、より以前の数年の「説明(すること)」“account(ing)”という用語を思い起させる。

- (14) 一種の記号学的理解も、会話理論 conversation theory において明瞭である：「[...] あらゆる話し手のコミュニケーション的な行為の意味は、文脈によって形成され context-shaped かつまた文脈が更新する context-renewing という点で、二重に文脈的である。ある話し手の行為が文脈によって形成されるというのは、進行している行為の連鎖にその行為がどのように寄与するかは、その行為が加わっている文脈——とくに直前の行為の配置を含め——との関わりを持ち出す以外には十分に理解できないということである。[...] 会話的行為の文脈を更新する context-renewing 性格は、それらの行為が文脈によって形成されるという事実と直接的に関係している。[...] その次の行為の文脈も、あらゆる進行中の行為とともに更新され続けるのである」(Heritage 1984: 242)。
- (15) 次節で触れる人工物以前に、Simon の「人為的なものの諸科学」‘sciences of the artificial’ (1969) を思い起すことが適当である。人為的諸現象は、「あるシステムが、目標や目的により、それが生きている環境に合わせて形作られることによって初めて、人為的現象となる。もし自然現象が自然法則に従うことで「必然性」“necessity”の感じを与えるとするれば、人為的現象は、環境による順応性をもつことで「偶然性」“contingency”の感じを与える」(p. ix)。それらは注目すべきものであり、かつ記述すべきものである。そこで、基礎的主題は次の通りである：「人は、行動するシステムとして見る時、まったく単純である。時間の経過のなかでのその行動の明らかな複雑さは主として、その人がおかれている環境の複雑さの反映である」(25, 52; 強調は原文のまま)。この環境的に注目すべきものは、歴史とフィロロギーにおいて常に登場してくるものなのである。
- (16) Keller の著作は 10 年以上前から利用可能であったが、無視され続けてきている。もちろん、言語学者たちが 100 年以上前に変化のよりすぐれた観念をもっていたことを読んで知るのには、恥ずかしい思いをさせるものである。同じことが同じ力を以て Nerlich の本に現われる。アメリカにおける言語学の現況は、完全な無能力に隣り合っている：私の同僚の何人かは、最近 (1990)、言語学の歴史は 1957 年以後非常に豊かになっているのであるから、言語学史の課程は、それだけを扱うべきだ、という考えを表明したものである！歴史に対するこの種のアプローチは今や、東欧では拒否されているが、しかし、同じ公正さがアメリカ合衆国、特にカリフォルニア（というのは、そこでは、指導的立場が生成文法だからである。カリフォルニアはいま常識に反対するもっとも頑迷な遺物的地域である）に広がるまでには恐らく長い時間がかかるだろう。現在行なわれている生成文法の論理的欠陥については上記の注 4 を見よ。Keller は正当にも、生成論者は変化を理解するあらゆる可

能性から自らを自己制限していることを指摘している (78, 154-164)。自己制限は、生成論者が学者の共和国で多数派を握っていない限りでは、危険はないという (p. 159)。いくつかの陣地では彼らは多数派なのである。

- (17) 歴史的説明についての話において、人は、型にはまった例を用いる傾向がある (例えば, Brutus killing Caesar, Caesar conquering Britain, 等)。そこで、私にも一つの良い例を繰り返し使わせてもらおう: ある人はある時、フィンランド語が文法的性の形態素をもっていないのは欠点であると感じた。その解決法は、バルト語からの借用語 *tytär* 「娘」を二つに切断することで見出された: *ty-tär* とするのである。これはまったく思い切った解決法である、というのは、CV の形の名詞は全然存在しないのだからである。類似した例が Vít Bubeník によってトルコ語から挙げられているがトルコ語では、スラヴ語からの借用語 *kİraliçe* 「女王」が *-içe* を生み出し、それが、*-tar* と同じように、本来語にも広がるのである (*Diachronica* 6. 131-132 [1989])。

訳注

<注意>

本訳注で「論文(1)」というのは、今回連載している「論文選集」の第1回目として訳載した論文、即ち『中京大学教養論叢』第36巻1号, pp. 263-313に掲載された「1990年代初頭における変化とメタ理論: 歴史の優先性」のことを指している。

- [1] 「この会議」については、「訳者解説」の冒頭部分を見ていただきたい。

ここで言及されている3人の学者の報告については、Bernd Heine のものは不明であるが、他の2人は、次のような題目の報告をしている。

Richard Janda: “‘Language Change ... Always Takes Place in the Present... Governed by Constraints on Synchronic Grammars’: Against So-Called ‘Diachronic Processes’ and ‘Explanatory Mechanisms of Change’ That No Speaker Could Possess”. 「言語変化は... 常に現在において起こる... 共時的文法に対する制約に支配されて」: いかなる話し手ももつことのできないいわゆる「通時的過程」と「変化の説明的メカニズム」に反対して」

Brian D. Joseph: “Diachronic Explanation: Putting Speakers Back into the Picture”. 「通時的説明: 話し手を構図のなかに戻す」

- [2] この図で、Output 1 から Universals を経て Grammar 2 に達する推論が A [= 仮説形成推論] となっているのは、幼い言語学習者にとって模倣すべき大人の表現 Output 1 は与えられた「結果」であり、そこから自らの Grammar 2 [= 事例] に到達しようとするが、一方で、その学習者は、Universals [= 規則] に基づいて推論する側面をもつ、つまり、結果と規則から事例に到達する推論を行なうのであるから、これが仮説形成推論と判定されるわけで

ある。さらに言い換えれば、学習者は、結果と規則から、「おそらくこういう文法なのだろう」と推測して、自らの文法を作り上げるのであるが、その推論による文法が大人の文法とぴたり一致するとは限らない、むしろ微妙にずれることの方が多いであろうから、そこで変化が生ずることになるのである。仮説形成推論が変化の源の一つとされる理由である。

- [3] Coseriu の著作で日本語で読めるものについては、論文(1)の訳注 [8] を参照。
- [4] この文から、次頁の「Hermann Paul が言ったように、言語学は実は歴史言語学なのである」までは、論文(1)pp. 282-3 の引用文章と同じである。論文(1)の「訳者解説」で指摘したことであるが、アンティラは、「歴史」が基本的に視野に入っていない現在の支配的理論に対して、本の形で（例えば、*Historical and Comparative Linguistics*. 1989）批判的主張を述べるのと同時に、論文においても、圧縮した形で、考えを繰り返し述べることで、少しでも多くの研究者に、自らの主張を伝えようとしているようである。そこで、しばしば同じ趣旨の内容の繰り返しや、この場合のようにまったく同じ文章が用いられることがある。以後その細かい指摘は省略する。
- [5] 論文(1)でも、「行為理論」に関連して von Wright が取り上げられていた。論文(1)の「訳者解説」でも指摘したが、アンティラの理論的背景にはパースの記号行為学と共に、おそらく年代的には、パースに親しむ以前から、von Wright の哲学がある。著者のウリクトの理論の扱いは、当然だろうが内容の解説までは行なわない。ここで長くなるが von Wright が示している図形と必要最小限のその説明を、翻訳『説明と理解』（産業図書、1984）から紹介しておくことが今後のためにも有益であろう。

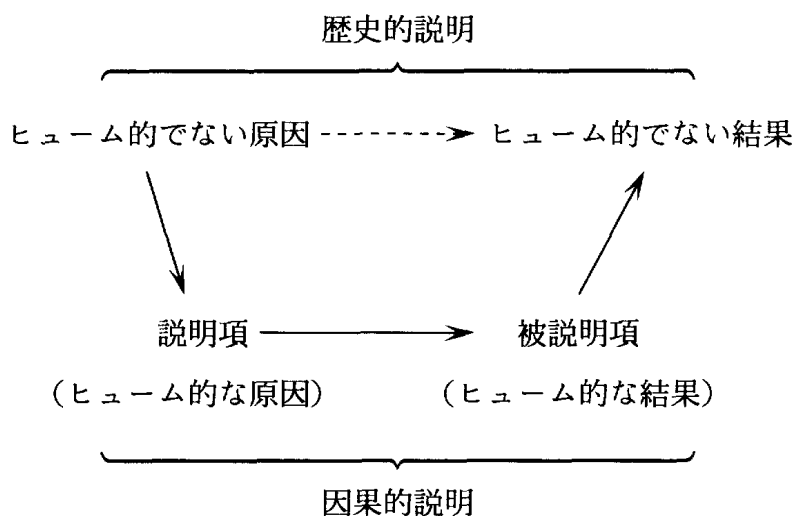


図 6

「一般化また単純化していえば、十分条件を求めるような因果的説明は、歴史や社会の研究と直接的に関連するのではない、といえるだろう。...しかしその種の因果的説明は、間接的には二とおりのしかたで、歴史的研究と関連している。第一は、被説明項が、それ以後の人間的事柄に、興味ある「結果」をもたらす場合である。第二は、説明項が、それ以前の人間の行為や人間の条件の中に、興味ある「原因」を有する場合である。そこで、説明項のヒューム的でない原因と、被説明項のヒューム的でない結果とを結びつけるということが、しばしば本来の因果的説明の役目となる。...歴史家が興味をもつのは、こうした結合なのである。図6を見れば、そのことが明らかになる。」(pp. 179-180)

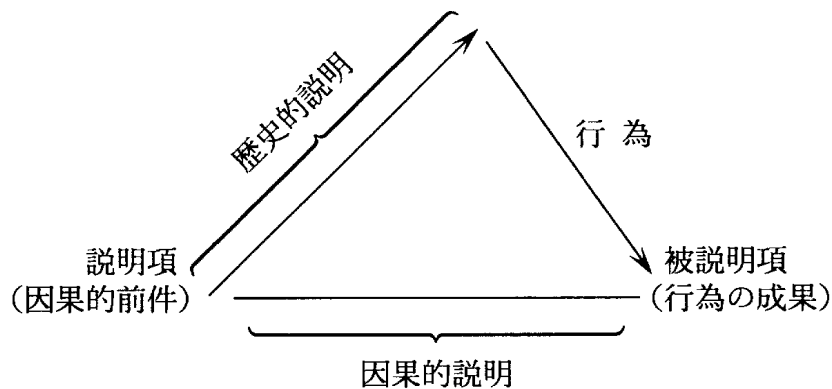


図 7

「ここでもまた、この種の因果的説明が、歴史学といかに関連しているかということが問題となる。この種の因果的説明が、歴史学となんらかの関連をもつためには、その被説明項は、——個人の行為であれ集団の行為であれ——行為の成果でなければならぬ。この条件が満たされるなら、その種の因果的説明は、「なぜ行為が為されたのか」という問いではなく、「いかにして行為が可能だったのか」という問いに答えるというかたちで、歴史学と関連することになる。図7は、このことを明らかにしている。」(p. 181)

準因果的な歴史的説明

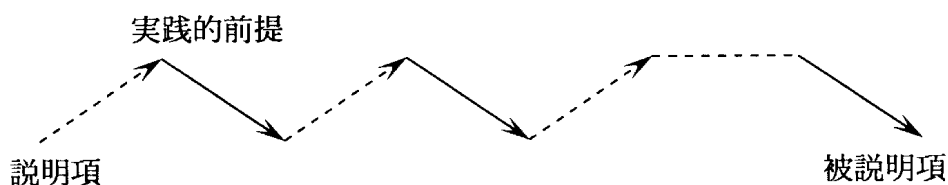


図 8

「一連の独立した出来事が与えられている。例えば暗殺、最後通牒、そして戦争勃発である。すでに述べたように、これらの出来事は、実践的推論に

よって結びつけられている。だが、いかにして結びつけられているのだろうか。... この暗殺という出来事は、いわば「潜在的」に存在する実践的推論を、「現実化」させ、あるいは「発動」させたわけである。現実化された実践的推論の結論（最後通称の交付）は、また別の状況を生み出し、この状況が、（ロシア内閣の側に）新たな実践的推論を現実化する。そしてこの新たな実践的推論によって、これまた新たな状況（軍隊出動）が生み出される。このように実践的推論がさらに積み重ねられ、その最終的な「結論」が戦争の勃発である。図8を見れば、以上のことは明かとなろう。この図において、破線の矢印は、ある事実が実践的推論の前提に影響をおよぼすということを、意味している。また実線の矢印は、前提からの結論として、新たな事実が出現することを意味している。」（pp. 187-8）

長くなったついでに、これまた長くなるが同書から「実践的三段論法」についての次の説明を引用しておこうと思う。

「アンスコムは、伝統的な用語法では実践的三段論法（practical syllogism）と呼ばれている推論の、特殊な論理的性格に、ひとびとの注意を促してきた。この推論の着想は、アリストテレスに由来しており、彼女によれば、アリストテレスの最高の発見のひとつであるが、後代の哲学が、それをまちがって解釈して、見失ってしまったのである。ところが、それを正しく解釈するための手がかりは、容易に見つからない。この問題に関するアリストテレス自身の論述は、きわめて雑然としており、またその実例もしばしば混乱している。アリストテレスの中心思想を再構成するひとつの道を示せば、次のようになろう。まず、実践的三段論法の出発点、つまり大前提は、行為者が欲しているもの、ないし行為の目的を述べる。次に小前提は、大ざっぱにいうと、目的への手段として、行為をその目的に結びつける。最後に結論は、その目的を達成するために、その手段を用いることである。このように、理論的推論において、両前提の肯定が、必然的に結論の肯定に至るように、実践的推論では、両前提への同意が、両前提に合致する行為を伴立するのである。

アンスコムによると、実践的三段論法は、論証の一つの形式ではなく、従って論証的三段論法とは別の種類の推論であるが、この点で彼女は正しいと思われる。しかし、実践的三段論法の特性和理論的推論との関係は、複雑であり、いぜんとして不分明のままである。

実践的推論は、行為の説明や理解にとってきわめて重要である。実践的三段論法が、人間科学の方法論に久しく欠けていたもの、つまり包摂説明理論に代わるべき明確な独自の説明モデルを、人間科学に提供するということが、これが本書のひとつの主旨である。大ざっぱに言えば、包摂理論的モデルが、因果的説明および自然科学の説明と連関しているように、実践

的三段論法は、目的論的説明および歴史学や社会科学の説明と連関しているのである。」(pp. 34-5)

- [6] 「全体をおおう法則モデル」の原語は、covering law model である。上記『説明と理解』では、「カヴァー法則モデル」としている。その内容の説明をしている部分を紹介しておこう。

「説明に関しては、それまで分析哲学の伝統の内部で議論されていたが、これに決定的な刺戟を与えたのは、1942年に『哲学雑誌』に公表されたヘンベルの古典的な論文、「歴史学における一般法則の機能」である。…ヘンベルの説明理論は、「カヴァー法則モデル(理論)」(Covering Law Model or Theory) という名で知られるようになった。この名称を発明したのは、説明理論の批判者のひとりであったドレイである。これに代わる名称、おそらくより適切な名称は、「包摂説明理論」(Subsumption Theory of Explanation) であろう。ヘンベルは、その後の一連の著作において、もとの意見を敷衍し、より明確なものにし、いくつかの細部に修正を施している。また彼は、カヴァー法則モデルを、二種の下位モデルに分ける。本書では、この二種のモデルをそれぞれ、「演繹的法則論的モデル」(Deductive-Nomological Model)、および「帰納的確率論的モデル」(Inductive-Probabilistic Model) と呼ぶことにする。」(pp. 13-4)

- [7] Esa Itkonen については、論文(1)のとくに pp. 272-274 参照。また、アンティラは、Itkonen の *Causality in Linguistic Theory* (1984) の詳細な紹介論文を書いている (Anttila 1988)。その紹介論文はいずれ本「論文選集」に加える予定である。

- [8] 「不一致理論」について、著者の *Historical and Comparative Linguistics* から関連部分を紹介する。

「時間の中で展開するすべての「生命をもつ」‘living’ システムは、想起的—予期的一貫性を必要とする。一貫性は、すべての構造主義において決定的な概念である、例えば、不断の体系化としての言語使用と変化である(そして、すべてのそれらの概念は、目的因関係の分野に入る)。仮説形成は、一貫性と理解可能性をもたらすための主要な(心理的)用具である (§ 23.6)。集団的行動においては、矛盾を消去する不断の衝動が存在する。例えば、認知的不一致の理論 *theory of cognitive dissonance* の提唱者たちによって分析される場合であるが、この理論によると、人々は多少なり意識的に、例えば「もし X なら、その時には Y」というような不定の多くの心理的含意を知っているという。いま「X と非 Y」が攪乱的矛盾を構成すると、例えば、「X」を「非 X」に変えるか、あるいは、「非 Y」を「Y」に変えるかのいずれかによって、それは解決されなければならない。「現実」‘reality’ のこのような操作が神経症的行動を生み出す時でさえも、それはそれ自身の領域においては合理的で論理的である (§ 21.20 参照)。一般的

には、人は、適者が存在する（意味の安定）まで意味を操作する。ここでもまた、構造的にはこれは、混乱の解釈学的消去と同類である (§§23. 1, 23. 6)。」(p. 409)

[9] この太字による省略形は、200 頁の図において、sm, rp, dp として用いられているので、注意。

[10] Boeckh については、下記訳注 [15] を見よ。

[11] 「不一致理論」については、上記訳注 [8] を見よ。

[12] 推測的歴史 conjectural history については、I.M. ハメット著、伊藤忠夫訳 (1989-91) 「モンボド卿の『言語の起源と進歩について』...」『中京大学教養論叢』30. 3-32. 1 でも詳細な検討が加えられている。第7分冊「索引」から言及箇所を紹介しておこう-1分冊-398, 405, 407; 2分冊-305, 329, 364; 3分冊-257, 271, 274n, 276, 281, 310; 4分冊-272, 286n, 288, 318; 5分冊-272, 274, 300, 301. なお、「見えざる手」は、徹底した合理論者であったモンボド卿が「見えざる手」を否定した関係で言及箇所は少ない-1分冊-388; 2分冊-332, 332n.

[13] von Wright の図形については、上記訳注 [5] を見よ。

[14] pattern explanation については、Anttila 1989b を本「論文選集」に加える予定である。

[15] August Boeckh については、最近の言語学関係の辞典では当然のことながら取り上げられていない（最新の『ドイツ言語学辞典』紀国屋書店、1994 にも、言及は全くない）ので、二つの文献を紹介しておこう。

・『研究社英語学辞典』（1940）、Philology の項目。（仮名遣い等変更）

「Wolf [1759-1824] の学問を発展せしめ大成したのが彼の弟子で影響多き学者 A. Boeckh (1785-1867) で、彼の見解は *Encyclopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften* (Bratuscheck 編。1886²) に遺憾なく表わされている。Boeckh の philology とはいかなる学問であるか。一言いうと「人間精神によって生産されたものの認識」即ち「認識の認識」(Erkennen des Erkannten) を目的とするものである。Philology の概念はこのように絶対的であるが、その領域は相対的で、学科によりまた時代・民族等の外的区別によって制限される。Boeckh の実際に扱ったのは古典の古代に限られているが、ギリシャ人・ローマ人の精神所産全部に亘っている。」

この説明のなかの「人間精神によって生産されたものの認識」即ち「認識の認識」というとらえ方は、論文(1)の注 (13) に引用されている Shapiro (1991: 65) の次の言葉と完全に一致する。「変化の説明は、従って、すべてのフィロロジック的説明の由緒あるやり方においては、予測的ではなくて、遡及言的である。我々は、達成された認識を意味の通るようにする（「再＝認識する」're-cognize'）のである。」（下線は訳者）Shapiro (1991) の「参考文献」

には、A.Boeckhの著作は挙げられていない。Boeckhの主張を知らずに、同じ結論に到達していることの意味は軽くない。(MSの段階でAnttilaはこの著作を読んでいる。その時にはまだ、その一致を指摘していなかったことになる。)

・中島文雄『英語学とは何か』(講談社学術文庫, 1991 [1932])

上記『研究社英語学辞典』のPhilologyの項目の執筆者も、間違いなく中島文雄であろうが、その『英語学とは何か』では、全6章のうち一つの章(「2A・ベックのフィロロギー」, pp. 38-57)をあてている。日本語で読めるベックの業績の解説としては、訳者の知る限りこれがもっとも詳しいものである。

参考文献

- Anttila, Raimo. 1976. "The Reconstruction of Sprachgefühl". *Current Progress in Historical Linguistics* ed. by William Christie, 215-34. Amsterdam: North-Holland.
- Anttila, Raimo. 1977. *Analogy*. The Hague: Mouton.
- Anttila, Raimo. 1981. "Space-Time, History, and Philosophy of Language". *Logos semantikos* ed. by Harald Weydt, vol.II, 213-219. Berlin: Walter de Gruyter; Madrid: Gredos.
- Anttila, Raimo. 1988. "Causality in Linguistic Theory and in Historical Linguistics". *Diachronica* 5. 159-180.
- Anttila, Raimo. 1989a. *Historical and Comparative Linguistics*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Anttila, Raimo. 1989b. "Pattern Explanation: Survival of the fit". *Diachronica* 6. 1-21.
- Anttila, Raimo. MS 1989. "Collaterality and Genetic Linguistics". *Proceedings of the Charles Sanders Peirce Sesquicentennial International Congress*, Harvard, September 1989. [in press].
- Boeckh, August. 1877. *Encyclopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften* ed. by Ernst Bratuschek. Leipzig: Teubner. (2.edn.ed. by Rudolf Klusmann, 1886; Reissued, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1966, and Ann Arbor, Mich.: Univ. Microfilms 'O-PBook', 1966.)
- Boeckh, August. 1968. *On Interpretation and Criticism*. Transl. by J. P. Pritchard. Norman, Okla.: Univ. of Oklahoma Press.
- Collingwood, Robin G. 1946. *The Idea of History*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- 小松・三浦訳『歴史の観念』(紀国屋書店, 1969?)
- Coseriu, Eugenio. 1979. "Humanwissenschaften und Geschichte. Der Gesichts-

- punkt eines Linguisten", *Årbok 1978*: 118–130. Oslo: Det Norske Videnskaps-Akademi.
- Coseriu, Eugenio. 1980. "Vom Primat der Geschichte". *Sprachwissenschaft* 5. 125–145.
- de Haan, Sies. 1988. *Over de logica van het TGG-onderzoek: Een kritiek op het taalkundig formalisme*. University of Amsterdam dissertation.
- Diesing, Paul. 1972. *Patterns of Discovery in the Social Sciences*. London: Routledge.
- Dougherty, Charles J. 1983. "Peirce's Phenomenological Defense of Deduction". *The Relevance of Charles Peirce* ed. by Eugene Freeman, 167–177. Monist Library of Philosophy. La Salle, IL: The Hegeler Institute.
- Gallie, Walter B. 1968 [1964]. *Philosophy and the Historical Understanding*. New York: Schocken Books.
- Heritage, John. 1984. *Garfinkel and Ethnomethodology*. Cambridge: Polity Press.
- Itkonen, Esa. 1974. *Linguistics and Metascience*. (= *Studia Philosophica Turkuensia*, 2.) Kokemäki: Risteen kirjapaino.
- Itkonen, Esa. 1983. *Causality in Linguistic Theory*. London & Canberra: Croom Helm; Bloomington: Indiana Univ. Press, 1984.
- Kapitan, Tomis. MS 1989. "Peirce and the Structure of Abductive Inference". *Proceedings of the Charles Sanders Peirce Sesquicentennial International Congress*, Harvard, September 1989. [in press].
- Keller, Rudi. 1985. "Towards a Theory of Linguistic Change". *Linguistic Dynamics: Discourses, procedures and evolution* ed. by Thomas T. Ballmer, 211–37. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Keller, Rudi. 1990. *Sprachwandel: Von der unsichtbaren Hand in der Sprache*. UTB 1567. Tübingen: Francke. 英訳, 1994. *On Language Change: The invisible hand in language*. Routledge.
- Langford, Glenn. 1971. *Human Action*. Anchor Book. Garden City, N.Y.: Doubleday.
- Lass, Roger. 1980. *On Explaining Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leach, James L. 1968. "The Logic of the Situation". *Philosophy of Science* 35. 258–73.
- Leff, Gordon. 1971. *History and Social Theory*. Anchor Book. Garden City, N. Y.: Doubleday.
- Lenk, Hans, ed. 1974. *Normenlogik*. UTB 414. Pullach bei München: Verlag Dokumentation.

- Lenk, Hans, ed. 1977–84. *Handlungstheorien—interdisziplinär*. 4 Vols. in 6 parts. Munich: Fink.
- Lenk, Hans, 1986. *Zur Kritik der wissenschaftlichen Rationalität*. Freiburg & Munich: Alber.
- Lightfoot, David. 1979. *Principles of Diachronic Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mandelbaum, Maurice. 1977. *The Anatomy of Historical Knowledge*. Baltimore & London: Johns Hopkins University Press.
- Martin, Rex. 1977. *Historical Explanation: Re-enactment and practical inference*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Nerlich, Brigitte. 1989. "Elements for an Integral Theory of Language Change". *Journal of Literary Semantics* 18.163–86.
- Nerlich, Brigitte. 1989. *Change in Language: Whitney, Bréal, and Wegener*. London & New York: Routledge.
- Peirce, Charles Sanders. 1931–35; 1958. *Collected Papers of Charles Sanders Peirce* ed. by Charles Hartshorne & Paul Weiss; Arthur W. Burkes, 8 Vols. Cambridge: Harvard University Press.
- Peirce, Charles Sanders. 1976. *The New Elements of Mathematics by Charles S. Peirce* ed. by Carolyn Eisele, 4 Vols. in 5 parts. The Hague & Paris: Mouton.
- Rion, Pierre, ed. 1987. *Histoire sans paroles. Cahiers de l'Institut de Linguistique de Louvain*, Vol. 13, Parts 3–4.
- Romaine, Suzanne. 1982. *Socio-Historical Linguistics: Its status and methodology*. Cambridge & New York: Cambridge University Press.
- Savan, David. 1980. "Abduction and Semiotics". *The Signifying Animal* ed. by Irmengard Rauch & Gerald F. Carr, 252–262. Bloomington, Ind.: Indiana University Press.
- Savan, David. 1988. *An Introduction to C. S. Peirce's Full System of Semeiotic*. Toronto: Toronto Semiotic Circle.
- Shapiro, Michael. 1985. "Teleology, Semeiosis, and Linguistic Change". *Diachronica* 2. 1–34.
- Shapiro, Michael. 1991. *The Sense of Change: Language as history*. Bloomington: Indiana University Press.
- Short, Thomas L. 1981. "Peirce's Concept of Final Causation". *Transactions of the Charles S. Peirce Society* 17. 369–82.
- Simon, Herbert A. 1969. *The Sciences of the Artificial*. Cambridge: MIT Press.
- Sullivan, William J. 1989. "Four Postulates of Government and Binding Theory". *The Fifteenth LACUS Forum* ed. by Ruth M. Brend & David G.

- Lockwood, 57-68. Lake Bluff, IL: Linguistic Association of Canada and the United States.
- Trigg, Roger. 1985. *Understanding Social Science: A philosophical introduction to the social sciences*. Oxford: Blackwell.
- Ushenko, Andrew P. 1958. *The Field Theory of Meaning*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- von Wright, Georg Henrik. 1963. *Norm and Action: A logical enquiry*. New York: Humanities Press.
- von Wright, Georg Henrik. 1971. *Explanation and Understanding*. London: Routledge. 丸山・木岡訳『説明と理解』(産業図書, 1984)
- von Wright, Georg Henrik. 1983. *Practical Reason*. Philosophical Papers, Vol. I. Oxford: Blackwell.
- von Wright, Georg Henrik. 1987. *Vetenskapen och förnuftet: Ett försök till orientering*. Stockholm (& Borgå): Bonniers.
- Ziolkowski, Jan. ed. 1990. *What is Philology?* Special-Focus Issue. *Comparative Literature Studies*, Vol. 27, No. 1 [Also as *On philology*. University Park: Pennsylvania State University Press, 1990].

訳注における言及文献 (著者の姓の五十音順)

- Anttila, R. (1988) "Causality in Linguistic Theory and in Historical Linguistics".
- Anttila, R. (1989a) *Historical and Comparative Linguistics*.
- Anttila, R. (1989b) "Pattern Explanation: Survival of the fit".
- Anttila, R. (1993) 伊藤忠夫訳「1990 年代初頭における変化とメタ理論: 歴史の優先性」(『中京大学教養論叢』第 36 巻 1 号) = 論文(1)
- Itkonen, E. (1984) *Causality in Linguistic Theory*.
- フォン ウリクト (1971) 丸山・木岡訳『説明と理解』(産業図書, 1984)
- 『研究社英語学辞典』(1940)
- Shapiro, M. (1991) *The Sense of Change: Language as history*.
- 『ドイツ言語学辞典』(紀国屋書店, 1994)
- 中島文雄 (1991 [1932]) 『英語学とは何か』(講談社学術文庫)
- I. M. ハメット著, 伊藤忠夫訳 (1989-91) 「モンボド卿の『言語の起源と進歩について』...」『中京大学教養論叢』30. 3-32. 1.